

地域子育て家庭への支援の充実
～身近に感じる保育所を目指して～

千葉県・市原市市津保育所

所長 荒木 幸子

ちはら台保育園（社会福祉法人きみの会）の概要

定員 165 名 現員 165 名 職員総数 47 名 設立平成 15 年 4 月 1 日

ちはら台東保育園（社会福祉法人 おもいやり福祉会）の概要

定員数 150 名 現員 157 名 職員総数 44 名 設立平成 22 年 2 月 23 日

ちはら台南保育園（社会福祉法人 おもいやり福祉会）の概要 （未満児保育園）

定員 60 名 現員 59 名 職員総数 30 名 設立平成 28 年 4 月 1 日

市原市辰巳保育所の概要

定員 1 6 0 名 現員 183 名 職員総数 46 名 設立昭和 46 年 4 月 1 日 改築平成 13 年 11 月 1 日

市原市市津保育所の概要 定員 70 名 現員数 65 名 職員総数 16 名 設立昭和 39 年 12 月 1 日

市原の人口約 28.00 万人 公立保育所 17 園、私立保育園 12 園があります。

1. はじめに

市原市は、東京湾に面した海沿いに姉崎・五井・八幡宿駅と J R が走り、そこは、臨海工場地帯です。五井駅から小湊鉄道で奥に入ると、養老溪谷と、自然豊かな山里に囲まれ、千葉県で一番面積の広い市と言われています。

今回の研究は、都心に直結する京成千原線の始発駅があるニュータウンのちはら台地区 ちはら台保育園 ちはら台東保育園 ちはら台南保育園 と団地から住宅地と戸建てが進む辰巳台地区 辰巳保育所 と昭和の古き良き時代がそのまま残る市津地区 市津保育所 それぞれ規模も経営母体も異なる 5 園でテーマに沿って進める。

この地域では、子育て家庭に何が必要なのか？どんな問題があるのか？を把握するために、アンケート調査をすることにした。

2. 研究 1 子育てアンケートより (H28. 6 月上旬頃)

- ①一日（休日）お子さんと過ごす時間は？ 一日中 32% 半日 35% 6～10 時間 9% 1～5 時間 24%
- ② お子さんとする遊びは？ 戸外→公園・ボール・砂場・鬼ごっこ・戦いごっこ・自転車等 室内→触れ合い遊び・玩具・絵本・お絵かき・パズル・ゲームテレビ等々
- ③ 食事を家族で一緒にとりますか？ はい 82% いいえ 18% ④ どんな会話をしますか？ 今日の出来事・食べ物のお話・家族や友だちの話
- ⑤ 家事・育児の協力をしてくれる人いますか？ 1 位 夫 2 位 祖父母 3 位 兄弟姉妹
- ⑥ 子育てで困ったことは？ はい 74% いいえ 26%
- ⑦ 困ったことがあった時の対処法？ 家族に相談 32% 友人に相談 24% ネット検索 21% 保育士に相談 15%
- ⑧ 保育所（園）への要望は？ 気軽に相談したい。親同士の交流の場がほしい。安全に過ごせる場所 考えて行動できる子に育ててほしい

<考察> アンケート結果から9割近くの保護者は子どもとの時間を大切に考えていることが解る。食事と一緒に摂り、休日は5.6時間子どもとの遊びに費やし、子育てをしっかりとしているように思われた。父親の育児参加は、保育所(園)の送迎が5割以上、困った時の相談相手としても7割以上という結果。結論としては、余裕をもって子育てをしている家庭が多いことに気づく。

研究1のまとめ

『どんな支援が必要なのか?』アンケート結果では見えない部分を探りたいと、相談箱を設置。子育て支援センター利用者から、情報を得たいと同時に多くの人に知って頂きたいと、すぐにチラシを置かせていただける場所を話し合い、スーパーや公民館に交渉した。そこから、徐々に利用者が増え、それぞれ5園が地域の特色を活かし、独自の取り組みに繋がった。

3. 研究2 5園の特性を活かした支援・取り組み

ちはら台保育園 保育園の中に子育て支援センターがある事を広める。



<方法> 支援センターの広報のためにコミュニティセンターやスーパーにチラシを置き、情報を発信。

<結果> 子育て支援センター内で防災に関する情報や食育において離乳食や相談会を行い、いざという時の赤ちゃんのおんぶの方法、さらしを使った知識も行う。

父親の参加も増え、食に関する支援も大切と感じ、栄養士・調理師が離乳食・試食会・相談と行いサポートも行う。また、園に相談箱の設置により、在園児の保護者から「子どもとの向き合い方」について相談もある。話し合いを設け、情報を共有し、保護者の心のケアに努めた。

<考察> 保育士、栄養士、調理師などの専門職がその専門性を活かし、子育て支援に関わる事の大切さを再認識することになる。そのような方の早期発見に努め、解決できるよう努めていきたい。

保育園だけでは大きな問題で取り組めない際には他の機関と連携を取り繋げて行くことも必要だと感じる。

ちはら台東保育園 イベント企画

<イベントを通し、支援の方法を探る> 核家族化が進んで久しいが、子育てにおいて年長者からの、子育ての助言をもらうことが難しい昨今、どんな子育てを求めているのか探る。

<方法> 支援センターの利用者対象のイベント活動を発信していく。

<結果> チーバくんと遊ぼう、夏祭り、運動会、救命講習等イベントに多くの方に参加し、企画を提供する事で保育所、センターの役割を果たしていたように思う。何故ならば、気持ちのリフレッシュをし、笑顔で帰られるからである。

<考察> 支援センターを活用する事により、母親同士、この子育てで良いのか、確認し合っている様子も見受けられる。その他、幼稚園、病院の情報を共有し、他園のイベントと一緒に参加する姿もあり、行動範囲を広げて楽しんでいるように思う。

また、何気ない他の子どもと遊び姿から我が子の成長を確認している。支援センターに集うことで、母親自身の気持ちの整理がスムーズになり、現状を受け入れる事が出来るのかもしれない。

ちはら台南保育園 育メン応援企画

<支援センターを生かして>

昨今父親の育児参加が必要とされる中、父親のつぶやきから、頑張っているパパ、頑張りたいパパの応援をしていけるような企画を考え、『育メン応援団』とした。

<結果>

1. コミュニティセンター、近隣スーパーにチラシを置き、広報していく。
夫婦参加の座談会形式の時間では、パパとママの本音を支援センター内に掲示。夫婦の会話に繋がっていった。また、女性と男性の感覚の違いを知るきっかけにもなった。
2. 講師を招いての親業の講座を父親向けに企画。母親が考える子どもとの関わり方と父親の違いに気付いてもらう。実践に移していきたいが、実際の子どもの関わりの中で確実にやって行けるかどうか？は不安の声。

土曜休みをとるきっかけ作りになり、家族での楽しい時間が持てたという感想もあった。

<考察> 男性の育児参加の意識は、高まっていると感じた。「男性がちょっと育児に関わると育メンと持ち上げられるが女性は？」という考え方の父親もいる程。しかし、掲示板の内容を確認すると、男性と女性の考えていることに多少違いがあり、それが夫婦間の思いのすれ違いとなり積み重ねられてしまうと、育児への不満に繋がるような結果になるのでは？と感じた。父親をサポートする企画を通して、家族で子どもを育ていけることの支援に繋がってきたい。

育メン応援団の会を重ねていくごとに、口コミ情報が少しずつ広がっているせいか、初来園の方から「育メンDAY」についての問い合わせが増えてきている。

辰巳保育所 イベント企画

<イベントを通し、支援の方法を探る> 保育所内支援センター担当職員と相談し、いくつかのイベントを考え、センターにおける子育て支援とは？を考えていく。

<方法> 親子で制作、親向け講座、保育所探検、給食体験、公園に集って遊ぶ、保育士と親子で雑談しながら散歩等々を企画し、各イベントの終了毎にアンケートを取る。

<結果> 支援センターの利用が少ない方もイベントには参加する傾向にあり、平日の利用者は顔馴染みの保護者が8割～9割である。年度の後半から両親で参加、または育休中の父子の参加が若干増える。参加する子どもの年齢は、ほとんど3歳未満児。なかでも1歳児が一番多く、制作より体を動かすイベントに参加する方が平均して多い。アンケート結果では、保護者の多くから「楽しかった」「子供の遊ぶ様子が見られて嬉しい」などの回答が寄せられた。

<考察> ・イベントに取り組むわが子の様子を見て様々な成長に気づくきっかけとなる。・保護者同士で子育ての情報交換をする場となっている。・情報を両親で共有することで父親もセンターや子育てに興味をもつきっかけとなる。・年齢にあった遊びに参加することで遊びの種類が増える。支援センターは、子育て中の地域の保護者が育児に関する情報交換などを通して繋がりを持つきっかけの場所にもなっている事が解る。

市津保育所 園庭開放への呼びかけと地域お年寄りと一緒に過ごす。

<市津保育所独自の取り組み>・設立昭和39年 昔ながらの平屋の木造施設。近隣に住むお年寄りは、この保育所を利用し子育てをしてきた方がほとんど。・子育て支援センターがない。・地域に子育て家庭が少ない。・園庭開放にはほとんど来ない現状に着目し、研究に取り組む。

<方法>・地域の方やお話し会の方と一緒に過ごす。(行事や昔遊び 計年10回 お年寄り4名のお話し会月2回)
・園庭開放への呼びかけ「遊びに来ませんか〜」(公民館にビラやポスターマイクを通しての呼びかけ)

<結果> 地域の方と過ごす事により徐々に打ち解け、会話も増え、子どもも職員も、交流を重ねるごとに笑いあう姿が、「地域の方と一緒に、子ども達を育てている」と強く感じる瞬間がある。

園庭開放も増え、来る度に職員や子ども達と馴染み、「我が子への見方が変わった。」と母親の声。

<考察> 一年間の活動を通して、子どもも大人も共感出来る時間を過ごす事で、世代を超え、回数を重ねるごとに信頼関係が築け、沢山の笑顔に出会う事が出来た。今度いつ来る・・・?と子どもの声。元気をもらう・・・とお年寄りの声。この地域独自の研究に繋がった。

戦後70年を過ぎ、様々な時代が流れ、軽快な音楽や遊び、保育も変わってきた。交流を通し、受け継ぐ日本の文化の良さを改めて感じる。ゆったり時間の流れる昔の遊びや日本の歌を伝えていく事を「私たち保育士こそが忘れてはいけない。」と痛感する。

これからも、世代間から学ぶ、地域に密着した「身近な保育所」を目指して行きたい。

研究2 まとめ

特性を活かした5園の取り組みや様々な活動は、保育所(園)側から間口を広げていくことで『身近に感じる保育所』『開かれた保育所を目指すための糸口となった。また、昔ながらの地域との交流を通した支援方法は、地域に暮らすお年寄りの方々により、保育所だけでは得られない笑顔の子どもたちを見て、一緒に保育士も学ぶことができた。地域と家族みんなで一人の子どもを育てるために、父親の応援もこれからの支援の一つだと感じる。

この研究の結果からイベント的な活動を企画し呼びかけることで、支援センターに集い易くなる事は確かである。そして専門職の保育士・看護師・栄養士との連携により、さまざまな不安をスムーズに整理をし、現状を受け入れることが出来るのではないかと痛感する。

全体を通した結論 今回の研究を通して、これからの子育て支援は、保育所(園)の子どもたちだけではなく地域をはじめ、あらゆる場面に目を向け、保育所が軸となり、子育てを発信していく必要があると痛感する。何故なら、核家族化や携帯などの普及により、人と繋がる事が希薄な社会の傾向がある。顔を見合わせ、人と会話を楽しむ環境を私たちが提供し、何よりも『子育て力』を応援したい。

また、人の温もりや情を感じさせる居場所を提供し、そこに行けば話を聞いてもらえる、そこから始まる人が繋がる場所であってほしいと願う。今、国を挙げて子育てを応援しようとする社会である。父母の育児休暇・育児時間の普及と女性が社会に進出するための支援の時代。地域を巻き込み、一人ひとりの保育士が未来の子どもの将来に携わる重要な立場である事を自覚し、専門性をしっかり持ち、地域から身近に感じてもらえるような保育所(園)になるよう努めていきたい。